誠に美しく、世界でも評判の蝶の一つだ）正に、どこから考えても蝶の王者なのだ。そして夏にエノキに生みつけられた卵からかえった幼虫は、一生懸命に葉を食べて（オオムラサキの名誉のために、おことわりさせていただくが、彼等は害虫ではない）3回ほど脱皮して、約2cm近くに育った所で冬を迎える。だが、ここに至るまでだって彼等は容易でないのだ。まずオオムラサキの親同志の結婚がうまくいくとは限らない。数少なくなってしまった蝶だから。次にメスが産卵するエノキにうまく巡り合うかどうかわからない。エノキ以外はだめだし、また、エノキも、松、杉、檜のように材木的価値のある木でもないから植林されることはない。リンゴやナシみたいに食用的意味を持った木でもなければ、桜、梅などのよう観光的価値のある訳でもない。植木にして役立つ訳でもなし盆栽にもならず防風林や遮音、遮光の役をなす並木にもならず、マロニエや銀杏みたいにスタイルよく街路樹になることもできず、だから山野に野生して、どこかひっそりと孤高を保ち、丁度野武士か浪人のような役柄の木なのだ。同じ野生にしても、ハンノ木のように湿地帯に多数まとまって生えるという芸当も出来ぬ木なのである。そこで、よしんば親蝶がうまくエノキに産卵出来たとしても、その数は、どんなに多くとも3桁がやっと。その多くが孵化前に、他の昆虫や鳥にやられ、うまく孵化してからも、蜂に寄生されるやら、鳥についばまれるやら、やっと秋も深まってエノキを下りて、うまく根本近くの落葉にしがみついて茶色の枯葉色の保護色と共にうまく越冬態勢に入れるものは幸福なのである。だが、その状況でも、彼等は落ちつける日は一日としてない。川のほとりなどにあるエノキだと、根本に下りて附近の枯葉に（エノキの葉でなくてもよい）しがみついている彼等も、ちょっとした増水で、結局流されて死んでしまうし、それより何よりの強敵は、何と云っても、からっ風なのである。歌劇のリゴレットの〝風の中の木の葉のように〝いつも変る女心!!」どころの騒ぎでない。せっかく必死で、つかまっている枯葉が吹き上げられてエノキから離れたら最後、もうオオムラサキになることは出来ず、自ら、国蝶になるべき運命を放棄して死ぬ他ないのである。あんまり枯葉の下敷になりすぎても湿気やリケッチャ、かび、コケなどとの競争に勝てず、腐ってしまう。だから筆者は、真冬に何とか生き長らえながら、やがて一国を代表する立派な蝶に育つべくエノキの下で厳寒に耐えて、けなげに越冬している幼虫を見ると、生命の神秘さ以上に、その頑張りを何とか人間として少しでも保護してやりたいという気になるのである。だから